

雲を咬む（その一）

今年（平成十五年）は折口信夫の五十回忌だそうだ。折口信夫は国文学者、民俗学者（柳田国雄に師事）、万葉学者であり、歌人でもあった。ここで、釈道空の歌系を鑑賞してみたいと思う。

- 気多（けた）の村若葉くろずむ時に来て遠海原の音を聴きおり（?空）
石川県羽咋市に気多神社がある。気多国平祭（けたくにむけまつり）が有名。季は春。
- 春畠に菜の葉荒びしほど過ぎておもかげに師をさびしまむとす（春洋）
春洋は折口信夫の養子である。
- 気の遠くなるまで秋の海越えて ゆき行かむ。 亡き 師に逢はむため（岡野弘彦）
岡野弘彦は五十回忌（9月3日）の祭主である。岡野弘彦の歌形は道空の歌形を踏襲している。

上記二歌は五十回忌参列者が唱和した歌であり、第三歌は五十回忌に、弘彦が詠った歌である。こう見てくると、?空の歌と春洋の歌の比較、春洋の歌と弘彦の歌の比較から、短歌滅亡論の良い材料がみつきりそうだ。

道空の歌で印象に残るのは、

- 葛の花踏みしだかれて 色あたらし-----。この山道を行きし人あり
（『海やまのあいだ』）

尚、（道空・ちょうくう）には外字を使用しているので、恐らくメールでは（?空）となるかもしれません。

雲を咬む（その二）

偶然、富澤赤黄男（かきお）の句を見た。解説に赤黄男は高柳重信に大きな影響を与えたとあった。とたんに、夜半亭さんの鑑賞を思い出した。鑑賞広場もすてたものではない、と思うことしきり。

- 石の上に秋の鬼みて火を焚けり（赤黄男）

ところで、この句、意味がさっぱりわからない。おそらく、句の背景を知らなければ解けないのではないか

雲を咬む（その三）

日本詩歌危うし？と詩人の高橋睦郎氏は『図書』10月号で語る。現代歌人によって“現

代短歌は『古今和歌集』など勅撰集時代以来の和歌とは別物”と宣言され、現代俳句は俳諧とは無縁のものとなり、現代詩はいまだに西欧詩の換骨奪胎に終始する。そこで、高橋睦郎氏は“日本回帰とか東洋回帰とかでなく、日本語で書く詩歌の根を、根ざしの土壌を考えなおす最後の時が来ているのではないか、と思うが如何？”と問う。今ここで「根ざしの土壌」が何であるか、答えられる詩人、俳人、歌人が何人いるだろうか。

雲を咬む（その四）

俳人の夏石番矢氏は、「有季定型」に固執する俳壇を批判し「世界俳句」を提唱する。その論点を見てみよう。

<夏石番矢氏は「詩文は翻訳できない」という発想を批判する。>

実例を挙げると、

- 木にのぼりあざやかあざやかアフリカなど（阿部完市）
- この句がフランス語に翻訳され、更に、日本語に訳されると、
- 木に登ること/ それは輝き 鮮烈な輝き/ 別世界の アフリカの
- となる。

これら二句を較べてみると、日本語の感覚と仏語の感覚の差があるだけで、句意にそれほど違和感はない。これは原句が詩文ではなく散文だからであろう。

蕪村の師、巴人の句を例にとると、

- 炭窯や鹿の見て居る夕煙（早野巴人）
- The charcoal kiln - / A deer watches/The evening smoke（ドナルド・キーン）
- 木炭の炉/ 一匹の鹿が見つめている/ 夕方の煙（英文の日本語訳）

原句と訳句を較べてみると、完全に原意が失われている。即ち『季感』は英訳できないのである。

有名な芭蕉の句、

- 古池や蛙飛こむ水のをと（芭蕉）
- The ancient pond - / A frog jumps in/The sound of water（ドナルド・キーン）
- 古くからある池/ 一匹の蛙が飛込む/ 水之音（英文の日本語訳）

原句と訳句を較べてみると、完全に原意が失われている。即ち『切れ』が英訳できないのである。

そこで結論、無季俳句はある程度まで翻訳可能であるが、『季感』のある句や『切れ』のある句は翻訳できないように思える。「詩文の翻訳」には限界あると知った上で、せめて伝達できるところは伝えようとする試みは無駄とは思えない。この限界を知ることこそ、本当の俳諧を知る手がかりとなると思われるからである。

<夏石番矢氏は「有季定型」に固執するのは「狭いナショナリズムと鎖国意識の合体した態度」と批判する。そして“喚起力に富み普遍性を持ったキーワード”の活用を提唱する。例

えば阿部完市氏の句における“木”がそれである。>

“狭い島国の季節感を越えて、より普遍的な詩的表現”を目指した「世界俳句」の提唱は、それなりに説得力がある。しかしそれは、翻訳可能な散文の世界であって、伝統と文化に支えられた言語による詩文は、その国だけにしか通用しないのではないだろうか。それはまた“わび、さび、しおり”は感知するものであって理解するものではない、との意味でもある。“幽玄やもののあはれ”なども理解の対象ではないような気がする。だが、伝達しようとする試みがあってこそ、本当の理解が深まるのではないだろうか。

尚、この文章は毎日新聞(2003年12月7日、朝刊)に掲載された、「世界俳句入門」(夏石番矢)に対する沼野充義氏の書評、夜半亭さんの「ドナルド・キーン入門」を参照している。

雲を咬む(その五)

仁平勝氏が「俳句時評」(毎日新聞、平成15年4月13日)で、「今日の俳人があまり前書を好まないのは、五七五の言葉だけで作品の世界を自立させるという志向がつよいのかもしれない。しかし日本の短詩型文学は、贈答や掛合いを本質的な要素として発達してきたもので、もともと自立するようにはできていない。」と述べ、前書の効用を見直すべきではないか、と主張する。瞬間的に「俳諧連歌」を想起した。そして“前書”があれば、俳句判じ物の原因を多少なりとも軽減できるのではないかと思う、と同時に、現代俳句では贈答句や掛合句が極めて少ないことに、改めて気づく。仁平氏が言うように、贈答句や掛合句も俳諧の要素として認識する必要がある。